様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月　 ４ 日現在

機関番号：１５５０１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３５００７３３

研究課題名（和文）日独英比較スポーツ史研究―帝国主義からファシズムへ―

研究課題名（英文）The Triple Comparative Studies among Japan, Germany and Britain on the Study of Sport History from the periods of Imperialism to Fascism.

研究代表者
池田　恵子（Keiko, Ikeda）

山口大学・教育学部・教授

研究者番号：１０２７３８３０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　2,300,000円、（間接経費）　690,000円

研究成果の概要（和文）：日英同盟期の融合文化規範としてのスポーツに着目した。質実剛健、良妻賢母は日本における中等教育機関の教育理念に相当したが、それらは英国中流階級のエリート教育において理想とされた教育理念を媒介し、スポーツ教育と帝国主義との関わりを経由している。第二次世界大戦の勃発以前には、スポーツ教育を通じて英国規範を活用したにもかかわらず、ファシズム期には国粋主義的文化規範への昇華を意図し、国防体育が実践された。いずれも、近代国民国家形成期に日本的ナショナリズムを構築する上で、巧みに利用された外国の文化システムの援用であった。これらを複合的に融合することで日本独自のスポーツ的風土が醸成された経緯を説明している。

研究成果の概要（英文）：This study focused on the cultural norm of sports as a mixed concept in the period of the Anglo-Japanese Alliance. Although both concepts of "simple manliness" and "good wife as well as clever mother" were the educational purpose as the ideal personalities penetrated into the secondary school institutions, they were transmitted by the medium of educational idealism in British elite schools and relationships between sports and imperialism. Despite the fact that British codes were activated through sporting education before World War II, physical education for national defense was implemented with the aim of sublimation of super-nationalism in the period of fascism. Both were the results of the Japanese political and educational strategies in which they cleverly referred to the cultural systems in foreign countries in making a modern nation-state. The process of how the Japanese climate of sports was fostered through the complex fusion of these foreign impacts was explained in the study.

研究分野：複合領域

科研費の分科・細目：健康・スポーツ科学　（細目）スポーツ史

キーワード：帝国主義　ナショナリズム　スポーツ史

１．研究開始当初の背景

平成20年度～22年度にかけて、国際学術ジャーナルを対象とし、過去20年間における方法論的特性の傾向・推移の分析を試みた（基盤研究（C）課題番号　20500547：国際学術ジャーナルにみるスポーツ史研究の地平に関する研究—1990－2010—）。分析にあたり、英国De Montfort大学ICSHC国際スポーツ史・文化研究所の研究者との交流が欠かせないものであった。最終年度の平成22年9月8日には同研究所所長のRichard Holt氏の助言の下、 Neil Carter氏を共同オーガナイザーとして、同研究所主催、日英比較スポーツ史セミナーを開催した(One-day Symposium: Japanese Reflections on the History of Sport, Wednesday 8 September 2010, Organised by the International Centre for Sport History and Culture, De Montfort University, Leicester, UK)。本セミナーには、英国在住のドイツ人研究者、Claus-Christian Szejnmann氏（Professor of Modern History, Department of PHIR, Loughborough University, UK）が参加しており、日独比較研究プロジェクト—闘争後のスポーツとナショナリズム（Sport and National Identity in Post-Conflict）への参加要請を受けた。こうして、本研究は3国を交えた日独英比較研究の試みとして着手する好機を捉えた。きっかけとなった申請者の発表は以下の２つであった。

・Keiko Ikeda, ‘The Body: A Historical Perspective’ (One-day Symposium: Japanese Reflections on the History of Sport, Wednesday 8 September 2010 (De Montfort University, Leicester, UK).

・Daishi Funaba & Keiko Ikeda, ‘From Sporting Amateurism to Fascism under the Period of Japanese Imperialism’ (同上).

すでに、平成 21 年度 7 月および平成 22 年度 9 月には、BSSH 英国スポーツ史学会にて個別研究発表を行い、平成 21 年度 8 月には、日本体育学会第 60 回記念大会における体育史専門分科会企画のシンポジウム（協賛：スポーツ史学会）における国際シンポジウムを立案、計画、実施し、「体育・スポーツ史研究の 20 年を振り返る～方法論と個別研究 Since 1989」と題したシンポジウムの司会兼コーディネーターも務めた。英国よりシンポジストを招聘し、講演の翻訳を担当した。シンポジウムの翻訳及び申請者によるシンポジウムの趣旨解説（前文）及び総括文は、翌年 3 月刊行の『体育史研究』にその全文が掲載されている。また平成 20 年の 12 月にアジアスポーツ運動科学会議において行った招待講演論文についても平成 22 年度に"The Body from the Perspective of the Historical Phase in Society", Michael Chia and Jasson Chiang eds, Sport Science in the East: Issues, Reflections and Emergent Solutions, World Scientific Publishing Co., Singapore and USA, 2010, pp.219-230）として刊行されるに至った。これら一連の研究が、本比較研究への着想を与えた。その詳細は以下に示す研究目的の通りである。

２．研究の目的

日英比較については両国における帝国主義政策下の日英同盟の時期を焦点化した。先行研究を整理しつつ、以下の観点を再検討することにあった。

＜大英国帝国主義下のアスレティシズム及びアマチュアリズムの日本的受容過程について＞

従来、日本におけるスポーツ思想善導政策は、日本固有の戦前の政治的イデオロギーに基づく教育政策として位置づけられてきた。しかしながら、先に示した論文、Daishi Funaba & Keiko Ikeda, ‘From Sporting Amateurism to Fascism under the Period of Japanese Imperialism’の中で、戦前の日本における「スポーツ思想善導政策」は、大英帝国流のアスレティシズムの受容過程に他なら

ず、これらを普及させる上で、日本流の宗教的脈絡に即して文化的翻訳を行い、概念定義化させた可能性があったことを指摘した。この点については、史料的補強を行い、そのプロセスをより詳細に明らかにする必要がある。

＜大英帝国主義からファシズムへ＞

次に転換期の問題に照射する必要がある。つまり、枢軸国に共通するスポーツ政策を捉え、日本的脈絡で進行した国防体育への移行過程の問題を明らかにすることである。

議会制民主主義や王室中心の近代国家モデルとして英国を多く参照し、加えて日露戦争直前には、日英同盟による政治的連座を機に、さらに共通する文化規範がもたらされたが、大英帝国流のスポーツ政策は、ファシズム体育への連鎖を生んだとして、分析される必要があった。入江克己が明らかにしてきたように（『日本ファシズム下の体育思想』[1986]、『昭和スポーツ史論―明治神宮競技大会と国民精神総動員運動』[1991]、『大正自由体育の研究』[1993]）にみられる大正自由体育とファシズムとの連鎖の構造に切り込む必要がある。しかしながら、日英同盟から日独伊への枢軸国を形成に至るまでの世界史の中で展開されたスポーツ政策の共通点を分析する研究は日本では皆無に等しい。

申請者が“ ‘Ryōsai-kembo’, ‘Liberal Education’ and Maternal Feminism under Fascism : Women and Sports in Modern Japan.”, *The International Journal of the History of Sport,* vol.27 Number3, (2010), 537-552.「近代日本における女性とスポーツ：良妻賢母主義からファシズム下の母性主義フェミニズムまで」を執筆した際、日本におけるフェミニズム運動が、当初、英国のフェミニズム運動、ブルー・ストッキング協会を意識していたにもかかわらず、後にドイツおよびイタリアのファシズムの影響を受けた母性主義フェミニズムへと傾倒したことに触れている。それは、1930 年代における日本の状況を世界史視野から捉えなおす必要を予見するものでもあった。この点は、本研究を始める上での予備試行的な思考プロセスを準備した。

３．研究の方法

以上の仮説を補強、検証する上で、以下の研究手法と鍵概念に注目した。

＜日独英比較研究の手法と鍵概念＞

【プロジェクト A:　日英比較スポーツ史研究】（2010 年 9 月に予備セミナーを De Montfort 大学にて実施済）

鍵概念：日英外交、英国流スポーツ・アマチュアリズム、アスレティシズムの受容過程に関する研究

【プロジェクト B：　日独比較スポーツ史研究　ナチズムと日本ファシズム】

鍵概念：闘争後のナショナル・アイデンティティーとスポーツ

【プロジェクト A＋B 】=　1920 年代から 30 年代後期以降の転換期における日本スポーツ史研究の読み直し。英国およびドイツとの比較スポーツ史研究の試み。

４．研究成果

日英同盟期の融合文化規範としてのスポーツに着目した結果、「質実剛健」、「良妻賢母」は、日本における中等教育機関の教育理念に相当したが、それらは英国中流階級のエリート教育において理想とされた教育理念を媒介し、スポーツ教育と帝国主義との関わりを経由したものであった。第二次世界大戦の勃発以前には、スポーツ教育を通じて英国規範を活用したにもかかわらず、ファシズム期には国粋主義的文化規範への昇華を意図し、国防体育が実践された。いずれも、近代国民国家形成期に日本的ナショナリズムを構築する上で、巧みに利用された外国の文化システムの援用であった。これらを複合的に融合することで日本独自のスポーツ的風土が醸成された経緯を説明

した。中でも原著論文として審査を通過した刊行予定である国際ジャーナル論文、Keiko Ikeda, "British cultural influence and Japan: Elizabeth Phillips Hughes's visit for educational research in 1901-02.", *The International Journal of the History of* Sport, (forthcoming.)は、世紀転換期と日英同盟の締結期にあたる1901年から1902年にかけて日本に滞在した、英国の教育家、エリザベス・フィリップス・ヒューズの残した論稿に注目したものである。これまで女子教育の範疇において注目されてきた女史の理論を帝国主義に共通する男女の教育政策を映すものであるとして、日英の帝国主義的脈絡の観点から問題提起し、平成25年8月および9月にISHPES国際学会、BSSH英国スポーツ史学会の双方でそれぞれ部分的に公表した。両学会での発表内容をまとめた論文は、現在、*The International Journal of the History of Sport* 掲載予定の原著論文として審議を通過した。現在編集中である。また、関連図書は、Keiko Ikeda, "From Ryosaikenbo to Nadeshiko: Women and Sports in Japan", in: *Routledge handbook of sport, gender and sexuality* edited by Jennifer Hargreaves and Eric Anderson, Routledge: London and New York, 2014, pp.97-105.として、平成26年2月に刊行された。

さらに、平成26年3月、本研究のまとめとして開催した日英比較スポーツ史セミナー（山口大学および龍谷大学）では、講演者、マーティン・ポリー氏（英国、ウィンチェスター大学）Dr Martin Polley, University of Winchester, UK の講演タイトル、「スポーツと帝国・外交―19世紀及び20世紀における英国のインターナショナルなスポーツ―」"Sport, empire, and diplomacy: British international sport in the 19th and 20th centuries"の全文を翻訳した。セミナー資料として配布済であり、本年、日本における体育史ジャーナルへの投稿を予定している。

セミナー要旨は下記の通りである。

要　旨

19世紀および20世紀において、英国人はいかに外交及び帝国に資する目的でスポーツを利用したのか。なぜ、英国統治政府および植民地行政官はスポーツに関与したのか。そして、そうした事実が、通常、政治的関与を拒む、英国スポーツに根ざしていたボランタリズムの伝統と対照的であることを示したい。本国と大英帝国を結びつけていたスポーツ的連座の例として、オリンピック大会、サッカーおよびクリケットの国際試合について提示する。報告では、それらのイニシアティブがどれほど達成されたのか否かについて査定し、これらの時期を通じて、英国統治政府が外国においてスポーツに関与することが、いかに公式化し、構築されたのかについて結論づける。

ポリー氏の分析は極東にも及んでおり、今後とも共同研究を実施する上での示唆的な概念が示されている。すでに、帝国主義下の両国比較スポーツ史研究の続行を申請し、平成26年～28年度　科学研究費補助金　基盤研究（C）　課題番号　26350746　「日英帝国主義に関する比較スポーツ史研究」として採択されている。

その他、分析に用いた図書の書評、著書の刊行、口頭発表を含め、以下の研究成果を公表している。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　5件）

① [原著論文] Keiko Ikeda, "British cultural influence and Japan: Elizabeth Phillips Hughes's visit for educational research in 1901-02." *The International Journal of the History of Sport*, forthcoming [2014年3月審査通過、現在編集中]　(査読有)

② [書評] Keiko Ikeda, Tsutsui, William M.

and Michael L.Baskett, eds, *The East Asian Olympiads 1934-2008: Building Bodies and Nations in Japan, Korea and China,* Danvers, Mass: Global Oriental, 2011, Pp.224, *Journal of Sport History*, vol.40, No.3, Fall, 2013, published by The North American Society for Sport History, pp.515-517. (**査読有**)

③ **［研究資料］池田恵子、マイク・ハギンズ氏訪日講演記録「スポーツ史研究におけるヴィジュアル・ターンの可能性：** Towards a Visual Turn in the Study of Sport**、日本体育学会体育史専門分科会編『体育史研究』30 号、2013 年 3 月、73-86 頁。（査読有）**

④ **［書評］** Keiko Ikeda, Henning Eichberg, *Bodily Democracy: Towards a Philosophy of Sport for All*, (Routledge: London and New York, 2010) *Sport in History*, vol.32, No.3, September, 2012 (Routledge: London & New York), pp.465-467. (**査読有**)

⑤ **[翻訳]マシュー・テイラー著（池田恵子訳)「イートン vs シェフィールド―アソーシエーション・フットボールの起源に関する論争再考―」**"Eton versus Sheffield: Revisiting the Debate on the Origins of Association Football"**、『体育史研究』第 29 号、2012 年 3 月、41-53 頁。(査読無)**

〔学会発表〕（計 7 件）

① Keiko Ikeda, "Comparative Studies between Britain and Japan through the Impact of Elizabeth Phillips Hughes' Lectures on Physical Exercises for Women to Japanese Society", The 2013 Conference of British Society of Sports History (BSSH), Wychwood Park Conference Centre, Crewe (UK), September 6th, 2013.

② Keiko Ikeda, "British cultural influence and Japan: Elizabeth Phillips Hughes's visit for educational research in 1901-02", The 14th congress of International Society for the History of Physical Education and Sport (ISHPES), National Taiwan Normal University, Taipei (Taiwan), August 22nd, 2013.

③ **[招待講演ラウンドテーブルワークショップ]** Keiko Ikeda, "Asian Sports meet Western Sports: Cross-cultural Exchanges", A panel for Roundtable Workshop, The 14th congress of International Society for the History of Physical Education and Sport (ISHPES), National Taiwan Normal University, Taipei (Taiwan), August 19th, 2013.

④ Keiko Ikeda, "The History of Sport in Japan: the British Influence through Sport on Nationalism", "Sport in Japan and Britain", One-day Symposium, Organised by the International Centre for Sport History and Culture, De Montfort University, Leicester (UK), July 9th, 2012.

⑤ Keiko Ikeda, "Pierce Egan's *Life in London* (1821) and the People's Memory of Sporting Enthusiasm", **ロンドン文学学会（ロンドン大学英語学研究所）** The Institute of English Studies, University of London, Organised by: The Literary London Society, London (UK), July, 6th 2012.

⑥ **[招待講演]** Keiko Ikeda, The History of Sport in Japan: the British Influence through the Medium of Sport on Imperialism, Nationalism and Gender, **祝** J.A Mangan **教授論文の国際的波及力を称える記念会議**: Manufacturing Masculinity: The Mangan Oeuvre, Global Reflections: From Past to Future, Jesus College, Cambridge University, Cambridge (UK), September 14th, 2011.

⑦ Keiko Ikeda, "Sports Writing in Britain, the Early Radicals and the New Left.", The 2011 Conference of British Society of Sports History (BSSH), London Metropolitan University, London (UK), September 2nd, 2011.

〔図書〕（計 1 件）

① Keiko Ikeda, "From Ryosaikenbo to Nadeshiko: Women and Sports in Japan", in: *Routledge handbook of sport, gender and sexuality* edited by Jennifer Hargreaves and Eric Anderson, Routledge: London and New York, March 2014, pp.97-105.

〔産業財産権〕
○出願状況（計 件）

名称：
発明者：

権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等
http://ds.cc.yamaguchi-u.ac.jp/~kikeda/curriculumvitae2.htm

６．研究組織
(1)研究代表者
池田恵子（Keiko Ikeda）
山口大学・教育学部・教授

研究者番号：10273830

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：